ミツバチ科学 23(3)：123—126
Honeybee Science (2002)

スロヴェニアの養蜂
—養蜂は生活そのもの—

F. Sivic

アルプスの南側，イタリアのフリウーリ地方とクロアチアのスラヴォニア地方の間には，すばらしい養蜂家たちの国がある．それがスロヴェニアだ．ヨーロッパで最小の国のひとつで人口は200万を少し下回り，ブカレストやケープタウンといった一都市に相当する程度である．スロヴェニアには約8千人の養蜂家がおり，ざっと計算すると国民千人に4人の割合で養蜂家だということがわかる．つまり，スロヴェニアは本当に養蜂家の国ということなのだ．

豊かな養蜂の伝統

砂糖が入手しにくい時代には，どの農家もミツバチを飼っていた．蜂蜜は唯一の甘味料であり，蜂ろうはろうそくの材料として欠かせなかった．当時，木製の巣箱は背が低く，互いにぴったりと並べられ長い列をつくった．この巣箱を“Kranjici”（カーニオラン）という．木造の小さな蜂小屋が果樹園の木陰に造られ，蜂群はひとつ屋根の下で飼われた．冬の雪や寒さ，夏の暑さからも蜂を守れるこのような伝統的な蜂小屋は，スロヴェニアでは今日も広く使われており（図2），風景に養蜂の彩りを添えている．

村の画廊

18世紀中頃，「巣門飾り絵画」というユニークな民俗芸術が，当時オーストリア・ハンガリー帝国の一部であったスロヴェニアで開花した．農民が家具やガラス器に絵を描くことが広く行なわれたこの時代，村の芸術家は巣箱前面の滑らかな木板に触発され，そこにも描き始めたのだ．これらの巣門飾りは今でもラドウリツアの養蜂博物館で賞賛を受けつづけている．

素朴な蜂小屋がやがて美しい野外の画廊になってしまった．村人は老いも若きも蜂小屋の周りに集まり，そこに描かれた歴史や聖書の中の出来事，あるいは村の日常生活から題材を得た色鮮やかな絵画を見て驚嘆した．このような巣門飾りがあるので，蜂は自分の巣箱をよりよく見分けられ，養蜂家もそれぞれの巣箱を識別しやすかった．どの群がすでに分蜂してしまったのかを覚えておくのに役立った．

すぐれた養蜂指導者

巣門飾りの流行と時を同じくして，スロヴェニア出身の偉大な養蜂指導者アントン・ヤンシャの仕事が始まる．1734年にブレドに近いブ

図1　ヨーロッパの中央に位置する国土20,300km²，人口2百万人の小国だが，その中にアルプス地方，地中海地方，カルスト地方，パンノニア地方などヨーロッパの異なる世界が隣り合わせに存在している．

図2　リュブリャナ近郊の典型的なスロヴェニア式蜂小屋

図3　アルペンローズに訪花するカーニオラン

レズニカという小村で生まれたヤンシャは農場を手伝い，青年時代には蜂を飼っていた．画家をめざしてウィーンへ行き，1969年に優秀な成績で美術学校を卒業した．しかし有名な画家になることが，彼に用意された運命ではなかった．当時オーストリアの女帝マリア・テレジアの命で帝都ウィーン市内アウガルテンに養蜂学校が設立され，小さな木造の蜂小屋も造られた．この学校の初代養蜂指導者にヤンシャは任命された．故郷から持ち込んだ蜂の生態に関する深い知識と比類なき知覚力，そして持ち前のウィットにより，彼は養蜂のすばらしい理論家であり実践家であるという名声を得た．

ヤンシャには2冊の著書があり，当時一般には想像もできない卓抜した考えを幾つか述べている．つまりdrone（雄蜂）は水を運ぶ蜂ではなく，女王と飛行中に交尾するミツバチの雄であること，女王蜂はdroneも含むコロニーのすべての蜂の母親であること，旧女王ははじめの分蜂で飛び去り，次の分蜂では新女王が飛び立つこと，また重度の腐蛆病にかかった巣板は他の群へ蜂を払い落とし，数日間飢えさせることで治癒し得ること，などである．細菌の知識など一般にはほとんどなかった時代に，今なお養蜂技術として通用するこの方法をヤンシャは推薦していた．39歳で早世したこの誇るべきスロヴェニア人が到達した以上ものを誰が知っているだろう．彼はスロヴェニアのみならず，実り多く働きそして没した国オーストリア，ウィーンの養蜂家の輝かしき先人なのである．

灰色の蜂，カーニオラン

現在のスロヴェニア領は，灰色の蜂カーニオラン（*Apis mellifera carnica*）の故郷である．腹部の縁に光る灰色の毛があることから，スロヴェニアの養蜂家は愛情を込めて「灰色熊のカーニオラン（Carniolan glizzly）」と呼ぶ．この蜂の性質として，従順，勤勉でおとなしく，すばらしい帰巣・定位能力を持つことが挙げられる．人に対して非常に温和で人家の近くで飼育できたのだろう．灰色の蜂の評判は他の国に，とくに在来種の黒い蜂 *Apis mellifera mellifera* が攻撃的だった中欧諸国へと広がった．19世紀末には生きた蜂群や分蜂群の取引が始まり，後には女王蜂も貿易の対象となった．Kranjicの名で知られる長方形で前後双方から開く巣箱は，荷車に積み重ね，遠い目的地へ輸送しやすくするためにつくられた．第一次世界大戦勃発までに，数万群のカーニオランが蜂専門のスロヴェニア商人によって輸出され，多くの場所で土着の黒い蜂を完全に駆逐した．今日この仕事は女王蜂育種家に引き継がれ，約3万匹の女王蜂が主に中央・西ヨーロッパへ，さらに他の国々へ輸出されている．

蜂蜜の国

蜂群取引が盛んになると養蜂見本市が開催されるようになった．毎年8月10日頃に，夏季の流蜜でいっぱいになった何千もの巣箱を持って養蜂家が集まった．買い手は蜂群販売業者や蜂蜜・蜂蜜酒（ミード）の販売人，そしてろうそく商である．販売された巣箱の蜂は通常硫黄で殺され，蜜巣板が切り分けられた．巣板は特

図4　民族衣装を着た著者シビック氏と夫人（左）
第37回アピモンディアが開催されるスロヴェニアの
首都リュブリャナ（右）

殊な圧縮装置でつぶし，加熱溶解して，ろうそくの材料とした．蜂蜜は国内消費，隣国への輸出のほか，一部はハチミツ酒やジンジャーブレッドに利用された．人類の豊かな想像力やデザインの才能は焼き菓子作りにも現れた．この独特の技術は代々受け継がれ，スコフャロカの辺りでは天才的な作り手たちが，蜂蜜，ライ麦粉，コショウ，シナモン，クローブ，灰汁を原料にジンジャーブレッドを焼き，上に植物をモチーフにしたカラフルな飾りを描く．かつては，結婚式など特別な機会にだけ作られたが，今ではユニークな土産物として売られている．

風土に適応した種

話をカーニオランに戻そう．この蜂による養蜂は，スロヴェニア，オーストリア，クロアチアに加え，中欧，東欧の国々でもうまくいっている．灰色の蜂は何世紀もの時間をかけて，スロヴェニアの気候や植生によく適応し，寒冷多雪な冬に強く，頻繁な雨や強風の夏を耐え，雑多な植物資源をうまく利用することを覚えた．トウヒやモミの森で，甘露を見つけ集める上手さも他系統をしのいでいる．衛生行動はよく発達し，病気による被害は少ない．またカーニオランは比較的少ない貯蜜でも，ちいさな越冬蜂球をつくって冬を越せる．しかし春の建勢時には爆発的に成長し，5月にすでにピークを迎えることもある．これはしばしば養蜂家を驚かす．急いで巣板を加え貯蜜スペースを補わないと，コロニーは分蜂してしまう．この分蜂傾向は，大規模な商業志向の養蜂家には望ましくない．だが適正な選抜と育種により，リュブリャナの養蜂研究所の専門家は，世界中の養蜂家に好まれる，分蜂傾向が低い系統をつくりだした．さらに彼らは遺伝的にミツバチヘギイタダニに耐性のある蜂群を選び出そうとしている．

蜂の輸送

スロヴェニアの約60%は常緑針葉樹と落葉樹の混交林で覆われ，多かれ少なかれミツバチの良い採餌場といえる．最も重要な蜜源植物はモミとトウヒで，次にクリ，シナノキ／菩提樹，カエデ，そして野生のサクラである．養蜂家は全国にいて，その蜂が栽培植物や野生植物の花粉媒介を良く果たすので，果樹園や大規模なアブラナやクローバーの農場でもポリネーション用の蜂は必要ない．かつては，とくに森林地帯で採餌条件が悪いときに蜂群をよそへ移動させた．古い記録によると，農民たちは大昔から標高の低い地域の牧草が刈り取られると，開花の遅い山岳地帯へ巣箱を移動させていた．蜂の輸送用に特別な荷車を考案し，目的地が遠い場合には牛や馬に引かせた．めざす先は主にリュブリャナやスコフャロカ，プトゥイ周辺の豊かで広大なソバ畑だった．ソバは7月末の小麦収穫後に蒔かれ，8月後半に開花する．天候がよければ蜂たちは最上の越冬食料を豊富に集められる．花蜜が大量に入るので，女王蜂はムダ巣に産卵することさえあった．蜂群は若返り，よい状態で冬を待つことができた．

樹木から分泌される甘露についての予測

今日では，養蜂家は主に森林地帯にミツバチを移動させてくる．モミとトウヒの甘露出現(mellowing)は多かれ少なかれ毎年あるが，場所により様子が異なる．そこで便利な出現予測サービスがある．森内の観察巣箱に集まる甘露の量がを随時発表し，有望な森の場所と分泌程度の正確な情報を供給する．それをもとに，養蜂家は自分の巣箱をいつどこへ移動させるか決定する．輸送には貨物トラックなど現代的な車両を用い，AZ巣箱をドミノのように積み重ねる枠を使う．AZ巣箱とは後ろ側から開く厚みのない巣箱で，前面に絵の描かれたロマンチックな“kranjic”巣箱から百年以上も前にとって代わったものである．隣のオーストリアと違いスロヴェニアでは，新しい移動用巣箱が全く定着していない．これはわが国の養蜂家がよく伝統を守っているということなのか？

それは誰にも判らないが，私たちも祖先と同様にミツバチを愛していることは確かだ．蜂は乾いて暖かな巣箱の中で飼いたい，頑丈な屋根をつけて悪天候から守りたいと思う．ミツバチは死なない，死なせられるのだ，とスロヴェニアでは言う．どんな動物よりミツバチに対して賞賛と尊敬の念を持っているのである．

アマチュアによる養蜂

スロヴェニアの養蜂家は年間2,000tの蜂蜜を生産し，国内消費を十分まかなえるので，輸入の必要はない．モミやトウヒの甘露が豊富なときは大量の蜂蜜が採れ，一部が輸出にまわされる．スロヴェニア森林蜜の品質は，ドイツのシュバルツバルトやスイスのジュラの林で採る蜂蜜にひけをとらない．生産者の大半は余暇に趣味として蜂を飼うアマチュア養蜂家である．彼らの小さくて忙しく動き回る友人は，ハチミツを作るだけでなく，考えること，観察すること，そして喜ぶことを教えてくれる．巣で病気が発生したときは，悲しみを分かち合う．

Varroa病など克服しにくい病気の出現により，若者が養蜂に興味を失って，養蜂組合の空席を埋める若い後継者がいない．この傾向はヨーロッパ各国共通であろう．スロヴェニアでは養蜂に再び活力を取り戻そうと，学校の選択授業として養蜂の基礎を教えるクラブがつくられた．ここで実践的な指導を受けた生徒の5人にひとりが，卒業後養蜂家となるなら，このコースの目的は達せられたといえよう．

養蜂組織

養蜂の主目的は蜂蜜生産であるが，養蜂家が得る蜂蜜以外の恩恵も重みを増している．養蜂組織に加われば，仲間から歓迎されて，我が家にいるような充足感を得られる．共に意見を交換し，専門的な講義や品評会，記念祝賀会など多くの活動を企画する．仲間との活動は養蜂家の生活を豊かにし，技術向上にも貢献する．スロヴェニア養蜂協会は130年前に設立され，現在傘下に200の組合がある．ほとんどの組合は独自の組合旗をもち，組合員の結婚会場で使われたり，告別式で墓穴に横たえられた故人の前で最後の敬意を表するために使われたりする．「スロベニアンビーキーパー」誌も由緒ある雑誌で，その興味深くていねいな記事は養蜂界にとって貴重な情報源となっている．

養蜂協会員を対象とした社会学的調査から，大変興味深い結果が得られた．ミツバチを飼養する家庭はよい状態にあることが多く，その子供達は学校で平均以上の成績を修めているという．卒業後はしばしば政治や経済，文化的な分野で重要な地位に就いている．子弟の多くは別の道に進むが，養蜂家であった両親を忍耐力，勤勉さ，慎み深さ，そして自然や故郷への愛を教えてくれたよいお手本であると認識している．これらが示すのは，スロヴェニアにおいて養蜂は，単に蜂蜜のために蜂を飼うことではなく，もっと多くのことを含むということだ．ミツバチは人々の暮らしと共にあり，養蜂は生活そのものなのである．

（翻訳　原野健一　　著者の住所は下記参照）

FRANC SIVIC. Beekeeping in Slovenia–A way of living. *Honeybee Science* (2002) 23 (3): 123-126. Local Organizing Committee, Apimondia 2003, Slovenia.